

# 方向

第一三六号 一九九一年一〇月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗

(二七)

1991.9.12

原田憲雄

屋上展望

一九四〇年(つづき) 五朗、四十三歳。

『水甕』昭和十六年二月号。

柳生村

冬ややに深み来てゐて松の山や二つ三つなる鳥の音の澄み

山深く風渡る時しらじらと葦間の池にうつる日のかげ(象)

峽空をすでに傾く日の寒さ山かへて鳥はしばし鳴きたつ

この村が柳生の村とたしかめし地図の上にして散り来るもみぢ (〃・水甕なし)

午後五時といふにはやくも灯をともし川音の中に沈む笠置村 (〃 )

こゑあげて児等が遊べる丘の上没日(いりひ)となりし空の明るく (〃 )

以上が、一九四〇年に作った短歌であろう。なお『水甕』昭和十五年の二月号には「小倉山に関する一考察」

三月号には「小倉山荘に就いての疑義」八月号には「定家卿と嵯峨」という論文を、六月号には「社内批評」に

「水鏡集」(準同人の作品集) 批評を書いている。「小倉山に関する一考察」は後に『続京都風土記』に、「定家卿と嵯峨」は『京都風土記』に収められる。

一九四一年 五朗四十四歳。勤務先、住所同じ。松子、四十三歳。朗、二十一歳。喜子、十七歳。樹、十三歳。哲、十歳。迪子、七歳。

一月十一日消印の原田宛葉書に「西の研究会 十七日(金)がよろしい。……小生の新古今の話 なかなか準備出来ず 今月も駄目です」という。当時、西の研究会の連絡・案内は原田が受け持っていたらしい。「新古今の話」は、前年の秋ごろ会員のあいだに新古今集についての講義をしてほしいという希望があり、先生も乗り気であったが、公私の多用でのびのびになっていた。

二月十六日午後一時から京大楽友会館で水鏡京都支社歌会があり、五朗の詠草。

世に知れぬ歌のいくつをよみすてて終る生命と思へど嘆かず

同月二十三日消印の葉書に、

……学年末の特に卒業生を担当してゐるのでこのところいささか追ひたてられてゐる形です。随つて二月の研究会も逐流会としてしまつた様なわけ、三月には必ずやるつもりでゐます。……辯勃として心に湧き上る創作欲! しかし貧しいみづからの才分に嘆きを新たにしてゐる様な昨今です。……

『水鏡』三月号。

関が原

この水のいづくへ行くは知らねども音にたつ川をしぼし愛(を)しめり 不破の関址 (庭宅 関の藤川)  
時雨にぬれしを行きて道遠し白き障子を閉めし家々 (〃 関ヶ原三首)

空ひろく見せて鈴鹿の山ありぬ今年雪を嶺にもちつつ 関が原

一日(ひと日)寄りし雲はれゆくに鈴鹿山盤(た)ちて南の空を寒くす (〃 続風十六卷三三六)  
興亡の転機を一時に決したる小早川秀秋はむしろすがしき (〃 六)

この三月から四月にかけて、長男の朗が、第三高等学校を卒業して京都帝国大学理学部に入学、次男の樹が、御室小学校を卒業して京都府立京都第三中学校に入学した。

『水鏡』四月号。

### 屋上展望

この国の遠く南に傾きてはたてと思ふ山に雪見(へみ)ゆ (庭六)

街の屋根くろくろと冬をある故にその上の空のはれてさびしき (〃)

雪降りて谷くま寒き山の前いろ薄き虹のたち明かりつつ (〃)

親が子に物を訊ぬる術なさも馴れて思へば子は育ちたり

浅き夜は月となりきぬ今日の雪いまだ葉にある静けさにして

四月二十日午後一時から大徳寺塔頭玉林院で石井直三郎・山村徳太郎二氏の追悼を兼ねた京都支社歌会が開かれ東京の本社から加藤将之らが加わり、三十名にちかい盛会だった。

さらさらと樹立すぎゆく風の音春深くして訪ふ人もなし 宮崎篤三郎

など十一人の詠草が出ているが、五朗のはない。このころ、西の研究會に出席していた杉田莊作、高田益雄らが水鏡社に入る。

『水鏡』五月号。

西 芳 寺

落ち静む椿の花はおのづから苔の上にして影を保ちぬ (風土二〇八)

裏山は竹もまじれる松山(杉山)の夕一とき(ひと時)を日ざしあかりぬ(ひざし明りぬ) (庭六)

気取りたる歩みをうつす人ありて苔寺の苔はいよいよ青し (風土二〇六・庭八四)

苔の上に影おく竹の二三竿逆光にみせてさむき日のくれ (庭八五)

おのづから径なして人を通はしむ苔のくぼみに静む(沈む)日の光(かけ) (日の色) (風土二〇三・〃)

池の底に動くともなき鯉のゐて夕光(ゆふかけ)ややに林泉(しま)に定まる (庭六・水鏡なし)

明日はまたよき晴れならむしくしくに夕べは苔の芽え明り来ぬ (風土二〇三・庭五・〃)

椿の花落ちしと思へ苔庭の遂に動かぬひるの静けさ (〃・水鏡なし)

塀の外を荷車よぎる音はしていよいよ青し苔に静む日 (風土二〇六・〃)

自らあるべき位置に静まりてこの石は冬の表情となる (〃・〃)

苔さむき池辺の庭をめぐる来て没日(いりひ)の空にしばしまむかふ (〃・〃)

中野野道遥の手紙 (六) 一春夢女史周辺 七 1931.6.14 原田憲雄

一八九三(明治二十六)年十月、中野道遥は病氣になって山龍堂病院に入院した。『富山房五十年』(昭和十一年、富山房)に収める楠山正雄「神田界限」に「駿河台の多分今の明大校舎の辺に在った、伯父の博士櫻村氏の山龍堂病院に寄寓の時代」という文が見える。道遥の入院したのもそれであろう。ここで「友を扱ばば高世の士、妻を娶らば絶代の人」にはじまる詩四首を作った。年末から翌一八九四(明治二十七)年初にかけて熱海の旅館で療養し「傷春十律」などを作り、伊東から湯島に出ようとして天城に迷い入ったりするが、一月四日帰京、五日、すむ宛の手紙をしたためる。

新年御慶何処も  
おなしき御事

御内皆様御前様  
御かはりも御座なく

めでたく奉賀

豆州熱海

昨年未かけて

御安心下され

度候 日頃

色々の事 御かたらひ  
申上たけれども

海山へだつる空  
のおもふも甲斐なき  
事にて候

たもみちへだたる  
ともへだてぬ

御心に交り玉はり度候

歌又御  
ふでのすさびなど  
時々 見せ玉はらば

何寄之事と存じ上候

御両親にもよろしく  
泰治様にも  
よろしく

先は御祝詞まで

いそぎ

あら

か

すむ子様

としのはじめ

朝日さす

遠山松の木の間より

雲をさして

いそぎ

あら

一月五日

重

すむ子様

としのはじめによめる

朝日さす

遠山松の木の間より

雲をさして



鶴なきわたる

鶴なきわたる

ここで「御両親様にもよろしく」というのがわかりにくい。すむの母は先に亡くなっているからである。あるいはそののち蜂音庵は再婚し、『誰が罪』では「母に代りて正一の世話なす……叔母」がその人なのであろうか。和歌の「鶴」は「たづ」とよむのであろう。その後の□□□□□□のところが、さらに一首、続くような感じではあるが、よくわからない。

この年三月、逍遙が恋していた南条サダが、弁護士の上三宅碩夫と結婚する。三宅は岡山県人で一八六五年生れ。後に徴兵保険株式会社の取締役や房総白土株式会社の監査役などになった。

逍遙はこれを悲しみ、四月、上州（群馬県）の旅をし、館林の南条家のあたりをさまよう。七月、文科大学を卒業し、研究科に入り、帰省するが、八月、郷里を出て九州に旅し、「感懐して、游に泣」いた（《中》九州漫筆序）。「世に一人のこひしき君」という言葉を含む「中野逍遙の手紙（二）」（『方向』一二五）は、その九州旅行の後、九月七日にすむに宛てたものであった。さらに、一通の手紙がのこっている。それを次回に。

4-18. さて、長老マハーカーシャバは、そのとき、この偈を説いた。

*atha khalv āyupān mahākāśyapaś teśāṃ volāyān iṃhā gāthā abhāṣata ||*

4-20. 不思議な、未曾有のこと、と大いに歡喜した、とどろくようなお声を聞いて、

われわれは、今日、このように、導師のころよいお声を聞いて。(1)

すばらしい、多量の宝が、たちまちのうちに、今日、われわれのものとなったのだ。

けっして考えたことも、求めたこともないもので、それを聞いてみな不思議がった。(2)

たとえば、愚かな人がいて、無知な連中にそそのかされ、

父のもとから逃げ出して、非常に遠い他の場所に行くようなもの。(3)

父はまた、そのとき、自分の息子の逃げ出したのを知って、悲しみ、

悲しみながら、いたるところを探した、五十年ちかい年月を。(4)

このように、息子を求めて、他の大きな町へ行き、

屋敷をつくって、そこに住み、五欲の楽しみを充たしていた。(5)

多くの黄金・白銀・穀物・財産・シャンカー・シラー・珊瑚、

象や、馬や、従者、牡牛や羊のような家畜もいる。(6)

融資や貯蓄を業とし、土地も下女・下男も多く、召使の群れをもち、

幾千万億の人々に尊敬され、また王に愛される人だった、いつでも。(7)

かれに対して合掌した、町の住民たちも、村の住民たちも。

多くの商人たちがかれの傍に集ってきて、多くの仕事に奉仕した。(8)

このように繁栄した人だが、老い、衰え、年寄りになって、

息子を悲しみ、想い起こしていた、夜も昼も、いつでも。(9)

「わたしの息子はあるに愚かで、五十年にもなる、逃げ出してから。

わたしにはこの広大な宝庫があるが、命の終りのときが近づいた」と。(10)

その愚かなかれの息子は、そのとき、貧しく、衰れで、いつも、

村から村へさまよい歩き、求めていた、食べ物や着物を。(11)

ācārya-bhūta sma tathā 'dhubūtās ca audbilya-prāptā sma śruṅitva ghoṣam ||

sahasaiya asmābhir ayam tathā 'dya mano'ña-ghoṣaḥ śrutu nāyakasya || ||

viśiṣṭa-ratnāna mahanta-rāśir muhūrta-mātreṅ 'ayam adya labdhaḥ /

na cinlito nāpi kadā-ci prārhitas tam śrutva ācārya-gata sma sarve ||2||

yathā 'pi bālaḥ puruṣo bhaveta ulprāvito bāla-jaṇena santah /

pituḥ sakāśātu apakrameta anyam ca deśam vraj so sudūram ||3||

pitā ca tam śocati tasmī kāle palāyitam jñātva svakam hi putram /  
 śocantu so dig-vidiśāsu haṃce (w:āñce) varṣāni pañcāśad-anūnakāni // 4//  
 tathā ca so putra Gaveśamāṇo anyam mahantaṃ nagaram hi gatvā /  
 niveśanam māpiya tatra tiṣṭhet samarpito kāmū (w:kāma) -gugehi pañcabhiḥ // 5//  
 bahum hiraṇyam ca suvarṇa-rūpyam dhānyam dhanaṃ śāṅkha-śilā-pravādam /  
 hastī ca bhāvās ca parītayaś ca gāvah paśūś caiva tathaidakāś ca // 6//  
 prayoga āyoga tathaiiva keetra dāsī ca dāsa bahu preṣya-vargaḥ /  
 susaktkṛtaḥ prāṇi-sahasra-koṭibhi rājīnāś ca so vallabhu nitya-kālam // 7//  
 kṛtāñjali tasya bhavanānti nāgarā grāmesu ye cāpi vasanti grāminah /  
 bahu-vāñijās tasya vrajanti antike bahūhi kāryehi kṛtādhikārāḥ // 8//  
 etādrśo rddhimato naraḥ avāj jīrṇāś ca vṛddhāś ca mahallakāś ca /  
 sa putra-śokam annucintayantaḥ ksapeya rātrim-diva nitya-kālam // 9//  
 sa tādṛśo durmati mahya putraḥ pañcāśa varṣā pi tadā palāyakaḥ (w:palānakah) /  
 ayam ca kośo vipulo mamāsti kāla-kriyā ca mama pṛetyupasthitā // 10//  
 so cāpi bālo tada tasya putro daridrakah kṛpaṅku nitya-kālam /  
 grāmeṇa grāmaṃ anucaṅkrantaḥ paryesate bhakta tathā 'pi codam // 11//

八月の終り頃だったと思う。残暑がきびしくて、息苦しいほどの日が続いていた。昼食は、主人と二人ならいっつも冷やしそうめんにする。氷を入れて、つるつると食べると後しばらくは涼しいが、じきに汗がふき出してくる。そんな時刻に、玄關に声がした。出てみると若い人が立っていた。あまりすっきりした服装ではないし、何も持っていない。わたしを見ると「こんにちわ、和尚さんいますか」と聞き、「ちょっと話したいことがあるんですけど」というので、それを伝えると、主人が出ていった。すこし訛のある言葉で、東北の人かと思われたが、山形で生まれ北海道で育ったと言っていた。まわりくどい話し方で、なにやらしきりに説明する。黙っていた主人は終わるまで聞くと「わかった」と一言いった。

「わかりました？ うまく言えないんで、どうしたらよいかと思ってたんですけど、だいたいわかります？ ほんの言葉わかりにくいんで」

「わかった」と、主人はまた言った。

両親と意見が合わなくて、かっとなって家を飛び出したのだけれど、一年ほど全国を歩いてみて、やはりこれでは駄目だということがわかったので、両親のところへ帰ろうと、京都まできたら旅費がなくなった。名古屋まで行けば、知り合いがあるから、そこまで行きたい。これから庭掃除でもなんでもするから、もしよく出来たと認めてくれたら、名古屋までの旅費をくれ、というのである。

「うんわかった。働くのやな。よし、そんならわたしが教えるから、こちらへ来なさい」

と主人は、若い人を連れて外へ出ていった。陽はかんかんと暑い盛りである。何をする気だろうと思っていると、裏へ行って、木の葉などを埋めるために掘ってあった穴を見せ、このようにして、木の枝や草などを入れるのだ。こういう穴を、これから表の方に一つ掘ってもらいたい、なお、掘った土は篩いにかけて、細かいのと粗いのに分けるのだ、というようなことを説明して、「そんなことはいやだ、というのなら、やめてもいいんだよ。できるかね」とだめおしされて、「できません」と自信ありげに答えた。

スコップと篩いを取り出している主人に、若い人は「この寺は何宗」とたずねた。「それが今のあなたにはぜひ必要なことなんか」「いいえ」「いらんことは聞かんでもええ」「はい」。男の人の会話とは面白いものだと思つて、わたしは中で聞いていた。

スコップを渡すと、小型のものだったので、大きいのがないのか、と聞いている。穴を掘るには、小さい方がずっと扱いやすいのである。物置の戸を開ける音がしていたから、言われたとおりの大きいスコップやつるはしを渡したのだろう。それからその人を連れてガレージの方へ行った。返ってきた主人はタオルを持って行ってやると、自分の部屋に戻った。

わたしは若い人が、昼食をしていないにちがいないと思つたので、トーストとミルクを持ってガレージへ行つた。その人はムクの木の下を掘っている。細い身体が汗まみれだが、顔はむしろおだやかに笑っている。二十歳代前半かと思われる幼い感じである。

「ここ、どうしたの、どうして？　いくら掘っても石ころばかり。すこし掘ったら粘土でも出てくるのかと思っただけど、いくら掘っても石ころばかり」

「そうですね、ここは石ばかりですよ。もとはずっと低い土地だった所にね、こんな石を入れて高くしてガレージにしたんですから、なんぼ掘っても石ころばかりなんですよ」

「ああ、それで、それで石ばかりなんだ」

「でも、いつも和尚さんはここをガンガン掘って、庭掃除のごみなんか埋めてるんですよ」

若い人はふうんと言って笑った。

「お昼、食べてないでしょ」

「うん」

「ここに置いときますからね。いくらか風があつて、木の下は涼しいわ」

「うん、ここは涼しい」

ずつと雨が降らないので、土は乾いて白っぽく、はたして掘れるだろうかと思うほど硬そうだった。水をかければ少しは掘りやすくなるかと思つたが、主人は、自分で考えてやれるようにやらせればいいのだ、という。

しばらくして、食器を取りに行つてみると、食べるとすぐに働いたらしかった。若い人は笑いながら、

「だいぶ穴らしくなつてきたでしょう。ああ、ご馳走さま、そこに置いてある」

と言つた。焼却炉の横の石の上に盆がのせてあつて、ミルクのコップに蟻がついていた。

「ほんと、だいぶ掘れましたね」

「うん」

また面白そうに笑って、仕事を続けている。力のありそうな仕事振りではないが、根気よく、跳ね返されながら石を叩いていた。時々、主人も見に行つて何か言っているらしかったが、そのうちに約束の穴が掘れたらしい。道具をかたづけ、手や顔を洗わせてから、そろって中に入ってきた。

「何時間ぐらいかかった？ 二時間？」

「一時間半ほどかな。二時間はかかるだろうと言っていたが、三十分ぐらい早くできたわけだな。まあよく頑張った、暑かっただろう」

「うん、でも木の下は風があつて涼しかった。一時間半か。石ばかりで、はじめはどうなるかと思つた。それでも少しずつやっているうちにだんだん穴らしくなつてきて、掘れるようになって、思つたより早くできたね」

「何でもそうだ。はじめはとっても出来そうにないと思つても、いろいろやっているうちに、少しずつ出来るものだから、あきらめないでやってみることが大事だな」

冷たい麦茶を飲みながらしばらく話していた。若い人は、二十六歳で、一年ほど前に家を出て、アルバイトをしながら九州まで行つたという。九州で同じ所に三か月ばかりいたので、着替えなどが溜まったが、帰ってくる途中、コインロッカーに入れて、取りに行けないうちに期限切れで処分されてしまったらしい。「暑い時だから何もなくてもいいんだ」といった。一年の間、一度も両親に連絡していない、とのことなので、案じておられる



だろう、と聞くと、「いや、二人とも働いているから」と事もなげの答えである。一年を一日くらいにしか感じていないのだろうか。姉が一人いるがすでに結婚している。

「それじゃあ、家の子はきみ一人ということじゃないか。ずいぶん心配しておられるだろう。葉書くらい出せよ。いや電話をかければいいんだ」

と言うと、それには素直にうなずいた。何度も書こうとしたが、どうしても書けなかったとも言った。

立ち去る後ろ姿に、また「きつと電話するんだぞ」とよびかけていたので、ここから掛けさせたらよかったのに、といたら、あの年齢だ、自分がその気にならなければ駄目だろう、と言葉をきった。しばらくして、金をくれとか、貸せとか言ってくるやつは数しれないが、働かせてくれと言ってきたのは初めてで、そしてとにかく働いた、あの男なら、きつと立ち直るだろう、とつぶやいた。

後で見にいってみると、直径が一メートルくらいで、深さ四十センチほどの穴が掘ってあった。

それからあまり日がたたない頃、玄関に聞き馴れない声が出た。出てみると若い人が戸を開けて外に立っている。わたしを見ると、

「ここはいいところですね、ほんとにいいところですね」

と言ってから突然、

「オーイ、オーイ北海道、北海道オオー」

と歌い出した。それはテレビのコマーシャルで聞いた歌だった。つまり北海道の産物売り歩いているのだっ

た。この人の言うことも要領を得なくてわかりにくかったけれど、稚内のみやげ物として造っている物を、大阪の茨木の出張所へ送り、そこから直接、訪問販売しているのである。今日からはじめて研修に出たのだというから、あなたは北海道の人なのか、とたずねたら、栃木の生まれだが、あちこちに行つて、いまは大阪から来たという。この人も、さきの若い人と同じように、放浪しているのだろうか。それでも、品物を持って歩いているのだから、仕事をしているわけである。稚内の製造会社名の入った品物の袋に、動くデパートと印刷されている。こんな珍味はぜいたく品だし、食べる人もないからいらぬ、と断ると、突然、「こんなのもあるんです」とかついでいた荷物から、どんどん出して玄關に積み上げた。ほんとうに動くデパートだった。イカ、貝ばしら、チーズ、タラ、昆布、鮭、どれもみんな珍味としてじょうずに製品化されていた。稚内のみやげ物として現地で売られているが、それほど大量に造れないので、小売店に卸すことができず、出張所を開いてそこへ製品を送り、販売員が歩くというこゝろらしい。たくさんの物を持っているのだから、保証金を出すか、何かの約束をして出てきているのだろうし、給料も歩合制なのだろうと思うけれど、何となく陽気で楽天的で、そのくせ、こちらが何か言ふと不安そうな表情を見せる。研修中なんです、今日が初めてなんです、と言っていたとおり、何がなんでも売りつけようというような強さがないので断わりきれなかった。ふわふわとして捉えどころがなく、こちらの言うことが通じているのかどうかわからない。とうとう昆布を買っておしまいにした。若い人にはかなわないと思つた。

秋の彼岸が過ぎて、ようやく涼しくなつた頃、昼食の準備をしていると、「こんにちわ」という声がする。こ

れも耳馴れない声だから、ああ忙しいのになあと思いながら出て行ってみると、小柄で、よく陽やけた若い人だった。髪を肩のあたりまで伸ばし、パーマをかけているらしくて、軽そうに流れている。長袖シャツにジーンズのその人は、少しよごれてはいるがおしゃれだった。ずっと働いていたけれど、病気で働けなくなったので助けてほしいという。飛騨の高山から出稼ぎに来ていたが、帰れなくなっているうちに、両親は亡くなってしまい、家だけはある……。この人も、家に帰る交通費をという。ずっと以前から、無心に来る人達の言うことは、いつでも同じである。

先日の珍珠売りさんで、わたしはもう、やさしさごっこにくたびれていたから、今日はどうしてもお断わりと思っていた。その人は福祉の方へ行って頼んだが、京都の者ではないので駄目だったという。これも同じようなことを何度も聞いた。絶対断わるぞと、深呼吸したところへ、声を聞いた主人が出てきた。その人の顔を見ると、

「あんたこの前も来たやないか」

と一喝した。わたしまでびっくりした。

「いいえ、ぼく来てません」

「あかん、この前に来たときには、赤い鉢巻をしていた。わたしはよく憶えている」

「ぼくとちがいます」

「だめだ。そんなことを言っても、あの時に話したことも、みんな憶えている。帰りなさい。帰れ！」

若い人は飛び上がって風のように立ち去った。わたしは自分できついことを言わなくてすんだからほっとした。

わたしが怒るときつすぎてみっともない。

後で聞くと、確かに以前に何度も来たということで、いつも赤い鉢巻をしていたらしい。ヒッピーなどがおでこに巻いている飾りでパンダナというものである。この若い人も、もとはヒッピーのようなつもりで家を出たのかもしれない。若い時は誰でも、社会の習慣に縛られることをいやがるし、意味のないことだと考える。しかしだんだんと年をとって、それが最も人の生き方にあった方法だとわかった時、平穩な暮らしのなかへ戻るのが難しくなっている。時期を失えば一生の間さまよい続けなければならないかもしれない。この若い人が以前に来たときには、主人は話に耳を傾け、本当に働く気なら、赤い鉢巻をはずし、長い髪を切って、働く人らしい姿にならなければ、使ってくれる人もないだろうと言ったらしい。パンダナははずしていたけれど、髪は短くしていなかった。わたしにはこのような若い人達に何も言う資格がない。わたし自身の姿でもあるから、ただ反省するばかりだけれど、こわしてしまった身体は、たとえ親でも、元どおりにしてやることはできないし、犯してしまつた罪や失敗を、まっさらに塗り替えてやることもできない。

「人間、最後のところ、自分のことは自分でするしかないねえ、みんなそれぞれに一人なんやわ」  
「そうなんよねえ」

力を込めて返事をした娘の顔を、わたしは思わず見つめてしまった。八月に来た若い人は、もう北海道の両親のところへ帰り着いただろうか、それともまだどこかでためらっているのだろうか。珍珠売りの若者は、今日も「オーイ、オーイ北海道」を歌っていただろうか。北海道も高山も、寒くなるのはもうすぐなのに。

慧遠<sup>えいげん</sup> 三三(四二) は高僧であつて、詩人ではありません。その人をここにもちだしたのは、かれは文学者ではないけれども、中国の文学にとっては重要な役割を果たした人だと思われるからです。その一つは、「遊記<sup>ゆうき</sup>」という様式を創めた、あるいは創めた人達のうちの有力なひとりではないかということです。遊記は、遊山・遠足・小旅行の散文記録で、自然描写に主眼をおくものです。慧遠の「遊山記」はつぎとおり。

この山に身を寄せて二十三年、石門<sup>せきもん</sup>には再度ゆき、南嶺<sup>なんれい</sup>には四たび遊んで、東に香爐峰<sup>かうろほう</sup>を望み、北に九江<sup>きゅうきう</sup>を眺めたものだ。聞くところでは、石井や方湖というのがあるが、中には、赤い魚が湧きあがるほどいるという。わたしにはうまく述べられないが、そのふしぎさには感嘆するばかり。

短いものです。このほかに「廬山記<sup>ろさんき</sup>」という、かなり長い文章があります。

山は江州(江西)尋陽<sup>じんやう</sup>の南にあり、山の南は宮亭湖の浜で、北は九江に対している。九江の南が小江で、山は小江から三十里余、……三江の合流点に位置する。

とその位置から説明をはじめます。テキストによって文字に異同が多く、「小江」を「盆江」とするものもあります。次いで『山海經<sup>せんがいきやう</sup>』を引いて山名の由来を語り、山は七つの大きな嶺からなり、周りはほとんど五百里、高巖<sup>しやうへき</sup>壁が万尋で、人も獣も通わぬ溪谷に隔てられている。『史記』の著者の司馬遷はこの峰に登って東西南北を観察し、董奉<sup>とうほう</sup>という仙人が巖穴に住んで人の病を治療してやり、全快した人には、礼として杏の苗を植えさせた

ところ、広大な杏林となった、といったことを述べ、

むかし、野仕事をする男が、この山で、沙弥の衣をつけた人が雲の上へまっすぐ突き抜けるのを見た。近づけば、人はその峰に坐っている。しばらくすると雲気とともに消えてしまった。

ということを記録しています。慧遠と同時代の湛方生もこれを「廬山神仙詩」にうたっています。その詩のかなり長い序文によると「神仙」の現れたのは「太元十一年」すなわち西暦三八六年のことです。慧遠が廬山に入つたのは三八四年で、法友のいた西林寺に同居しますが、人々が慧遠のために建てる東林寺の完成するのが三八六年なのです。慧遠がこの山に住み始めるとき日本の弘法大師にまつわるような奇瑞がたくさん伝えられているので、この僧形の神仙も、慧遠のことをいっているような感じもしますが、慧遠自身はひとごとのように語っていません。

「廬山記」の記事は素朴で、湛氏の序文は内容も表現も複雑ですから、どちらがどちらを利用したのか、あるいは野仕事の男の話を直接あるいは間接に聞いてそれぞれ別個に書いたのか、わたしには判断しかねます。

気流の不安定な山では、大気の密度の差が原因で、低地の人の姿が空に写るといふ現象があり、つい近頃までヨーロッパでも神秘的なことで喧伝されていたようです。湛氏の序文は神秘化にむかい、慧遠の記は大気の変動とする方向に傾いているようですが、いずれにしても、この高い山でおこる不思議な現象を四世紀末、五世紀初頭の慧遠たちが書き留めているのば、おもしろいことではありませんか。

さて、このあと甘露の湧き出る泉や、たちのぼる雲気が香煙に似るところから香爐峰とよばれている山のこと

などを描き「その中の鳥獸草木の美、靈藥万物の奇、ほぼその異なるを挙ぐるのみ」と、この文を結んでいます。  
また、慧遠には「廬山東林雜詩」と題する次のような詩があります。

崇巖吐清氣

高い巖は清氣を吐き、

幽岫棲神跡

ふかい山隈に神仙の跡。

希声奏群籟

微妙の聲が万籟かなで、

響出山溜滴

響きにつれて清水したたる。

有客独冥游

旅人わたしは独りさまよい、

径然忘所適

気づけば行くとも忘れていた。

揮手無雲門

手をあげて雲わく門を撫でていと、

靈関安足闢

靈界の扉もなんで開くに値しよう。

流心叩玄扁

心はなち幽玄のとほそを叩けば、

感至理弗隔

感じられる 真理は隔たったものではないと。

孰是騰九霄

だれだろう 九天高く昇るのに、

不奮冲天翮

翼もふるわずにすんだのは。

妙同趣自均

妙趣は神仙と同様で、

一悟超三益

一たび悟れば三人の友もつ利益にまさるのである。

「遊山記」と「廬山記」と「廬山東林雜詩」の三つが同じところに作られたのかどうかは、よくわかりません。「この山に身を寄せて二十三年」とあるところからすれば、「遊山記」は四〇七年前後で、慧遠の生没年に異説はありますが、はじめに掲げたとおりとすれば、七十三歳の作です。「廬山記」は、雲の上の僧形が出ますから三八六年、五十三歳以後であることは確かです。文体から察して「廬山記」は五十代後半から六十代初期、まず四〇〇年ごろまでのもので、「廬山東林雜詩」もその間に作られたのではないでしようか。

さて、文体分類学からいうと、「遊記」は「記」のうちの一体ということになりましよう。その「記」について明の徐師曾の『文体明辨』には、「記とは事を紀する文だ」という『金石例』を引いて事実を記録する文章であることを説明し、『書経』の「禹貢」や「顧命」が「記」の祖先であり、『礼』の「戴記」や「学記」が「記」の名のはじまりであること、ついで漢代の揚雄が「蜀記」を作ったが、文章の見本帖のような『文選』にその種類の文例が並べてないし、すぐれた文学評論家の劉勰も『文心雕龍』に言及していない。これは漢魏以前には作者が少なく、盛んになったのは唐代からであることがわかる。というようなことを言っています。

褚柏思『中国文学史類編』が、進んで次のように説明するのは、参考になりましよう。

遊記の文章は、中国ではあまり重視されず、雜記体の一種と見なされている。……遊記のたぐいの詩文は、かなり早くからあったが、嚴密に言えば、遊記の文章は、唐代の柳宗元の「永州八記」に始まるというべきだ。その前に『水経注』『洛陽伽藍記』や『大唐西域記』があるが、前者はじぶんで歩いてみた作品ではないから遊記とは呼び難く、後者は文学上の技巧が少ないから、これまた遊記文学とはいえない。……